

氏名(本籍)	わた なべ ふゆみ 渡邊 芙裕美 (長野県)		
学位の種類	博 士 (言語学)		
学位記番号	博 甲 第 5223 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	日本語学習者の読解中の予測についての研究 - 読み時間を指標として -		
主査	筑波大学教授	Ph.D. (言語学)	岡崎 敏雄
副査	筑波大学教授	博士 (言語学)	砂川 有里子
副査	筑波大学教授	Ph.D. (日本語学)	カイザー シュテファン
副査	筑波大学准教授	博士 (人文科学)	一二三 朋子
副査	筑波大学准教授	博士 (言語学)	小野 正樹

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語教育の読解教育実践の根幹にかかわる「学習者に予測しながら読ませるにはどうしたらよいか」、及び「そもそも学習者は予測しながら読めているのか」という疑問に答えることを研究目的とする。

本論文が焦点とする予測研究一般では、様々な要因が予測に影響を与えることが明らかにされ、主要な要因として既有知識、ワーキングメモリー容量、熟達度、文脈制約、読みの目的、読解前の指示などについて解明が進んでいる。これに対し、第二言語習得における読解の、予測を含む推論の本格的研究は未だ黎明期の段階にあり、日本語教育においてとりわけ十分とは言えず、「推論生成の頻度」の議論が中心になることが多く、どの要因がどの種類の推論に影響を与えるのかという点については十分に検討されていない。本論文は、このような研究ステージにある中で、教育実践の根幹にかかわる上記両疑問に答えることを研究目的とする。

本論文の構成は以下の通りである。

序章では、問題の所在、及び本論文の構成について述べる。

第1章では、予測に関して、予測とは何か、その測定方法、予測の有無、予測にかかわる要因に関する先行研究の成果と問題点を具体的に指摘し、本論文の目的と意義について述べる。

第2章では、日本語学習者が予測を行っているかどうかを調べるために行った実験について報告する。読解中の予測は文レベルでは、文の前半部分を手がかりとして、後半部分の内容が予測される。一方、文章レベルでは、それまでに読んだ複数の文や段落の内容(先行文脈)を手がかりとして予測が行われる。したがって、文章レベルで予測を行うためには、先行文脈に含まれる複数の情報を理解し、さらにその情報同士をつなげて、一貫性をもったネットワークを形成しておく必要がある、文レベルの予測と文章レベルの予測では難易度が異なり、文章レベルでは文レベルの予測より困難であることが推測される。そこで文レベル(実験1)、文章レベルの読解で予測を行っているか(実験2)を検証した。その結果、文レベルでは予測を行っているが、文章レベルでは行っていない可能性が示された。

第3章では、読解中の予測にどのような要因が影響を与えているのかについて先ず学習者内要因を取り上

げる。認知処理モデルである構築・統合モデル (Kintsch, 1998) は、まず構築段階で語彙の意味へのアクセスが行われている間に複数の知識ユニットが自動的に活性化し、これが予測を生成するための基礎となるが、この時点では複数の予測の候補が生成されるため、統合段階では先行文脈と背景知識に基づいてこれらの候補の中から最も適切な推論が選択される、つまり、読解中の予測には主に語彙知識と背景知識が関わっているとしている。そこで、第3章では語彙知識に焦点を当て、テキストに含まれる未知語が読解中の予測に与える影響を調べるため、筆記テストによって学習者の未知語数を調べた後に、学習者の一方のグループにのみ未知語の意味を教え、教えなかったグループと比較した。構築・統合モデルが語彙の意味へのアクセスを推論生成の前提としていることから、未知語の意味を学習することによって予測の生成が促されると考えられたが、両群とも予測可部分と予測不可部分の読み時間に差がなく、予測を行っていないことが明らかになった。この理由として、語彙リストで学習しただけでは、その語彙の処理の自動化は進まず、そのことが結果に影響していたことが考えられた。そこで実験4では、実験3で扱った上級レベルの語彙（実験3の実験テキストに含まれていた語彙）と比較して処理の自動化が進んでいると考えられる初級の語彙を多く含むテキストを使用して実験を行った。その結果、初級レベルの文章の読解では、読解中に予測が行われていること、従って語彙知識が読解中の予測の生成に影響を与えていること、読解中の予測に語彙処理の自動化が関わっていることが示された。

第4章では、学習者内要因の一つ、背景知識に焦点を当てる。質問紙によって学習者の背景知識の量を調べ学習者を2つのグループに分けて、一方のグループにのみ背景知識を与え、背景知識を与えなかったグループの読み時間と比較することによって、背景知識の量が読解中の予測に与える影響を検証した。その結果、背景知識が多いと予測可部分の読み時間が短くなること、すなわち、背景知識の量が読解中の予測に影響を与え、背景知識を与えることによって読解中の予測が促進されることが示された。

第5章では、学習者外要因のひとつである読解前の指示の影響について取り上げ、学習者を2つのグループに分け、一方の群のみ読解前に「予測しながら読んでください」という指示を与え、指示を与えた群と与えなかった群の読み時間を比較した。しかし、読解前に指示を行った群、行わなかった群で予測可部分と予測不可部分の読み時間に差が見られず、指示の有無が予測に影響を与えていないことが一旦は示唆された。しかし、この結果には読解前に与えた指示の内容が影響していた可能性があり、読解前に「予測しながら読んでください」という抽象的な指示を与えるだけでは読解中の予測を促すことは難しいことが推測された。そこで、一方の群にのみ具体的な指示を与え、読解前の具体的な指示が予測に与える影響を検証した結果、読解前に具体的な指示を与えた群の読み手は予測可部分を予測不可部分より遠く読んでいたが、もう一方の群ではこのような傾向はみられなかった。これによって、読解前の具体的な指示が読解中の予測に影響を与えていたことが示された。

第6章では、結論として各章で得られた分析内容をまとめ、本論文の結果が示す日本語教育への示唆について論ずる。本研究の結果から、学習者に文章読解中に予測を促すためには、語彙、背景知識、読解前の指示を操作することが有効であることが示された。第一に、語彙については、未知語が多く含まれている文章、意味を思い出すのに少し時間がかかってしまうような語彙が多く含まれている文章の場合、読解中に予測を促すことが難しくなること、したがって、学習者に予測しやすい部分の読み時間がより遠くなるような読み方を促したい場合には、それまで学習者が触れる機会の多かった語彙（例えば、初級の語彙）が多く含まれている文章ほど、読解中に予測を行うことが容易になるため使用する文章に含まれる語彙に十分注意を払う必要があること、第二に、予測に焦点を当てて授業をする際には、学習者が文章内容に関連する背景知識をすでにもっているかどうかを十分に考慮し、背景知識が不足している場合は、関連する資料や映像を見せるなど背景知識について学ぶ活動を行うこと、第三に、読解前に具体的な指示を与えることも読解中の予測を促すのに有効であり、予め読みのゴールを限定することによって、上位レベルの処理である予測を行うため

の認知資源を確保することが可能になることが示された。

## 審査の結果の要旨

日本語教育では、日本語学習者が読解中に行っている無意識的（自動的）なプロセスについて未だ十分に解明されていないのが現状である。そのような中、本論文は、日本語教育の現場の読解教育実践の根幹にかかわる「学習者に予測しながら読ませるにはどうしたらいいのか、そもそも学習者は予測しながら読めているのか」という疑問に答えることを目的とする。この目的のために、本論文は、第二言語読解研究、特に日本語教育研究で従来あまり用いられて来なかった読み時間を指標として導入し、それによって、意識的プロセスである予測のプロセスの解明を行った。その結果、①日本語学習者は読解中に予測をしているのか、②予測にどのような要因が関わっているのかを解明し得た点は高く評価される。この成果は次の二つの点で特筆に値する。第一に、読み手が意識的に行っている処理だけでなく、無意識的に行っている処理を読み時間が反映しているとされることから、多くの研究で読解プロセスを検証しているが、それを日本語教育の読解研究において操作可能化し実現し得たこと。第二に、現場の教育実践で指導教材の分野や、語彙レベルの指導方法に直結する背景知識、語彙知識、読解指示の要因を日本語学習者の予測に影響を与える要因として取り上げ、これらを包括的に説明するため、構築・統合モデル（Kintsch 1998）に沿って読み時間を指標とする研究デザインを操作可能化したこと。

但し、本論文が、初級レベルの文章予測研究に留まったことは、従来の予測研究の蓄積が十分でない日本語学習者を対象としたものであったことを考えても、日本語教育読解実践現場の全レベルの学習者の課題に応える研究として限界を持つと言える。しかしながら、これまで殆ど進められてこなかった日本語教育読解予測研究の水準を一段引き上げ、どの要因がどの種類の推論に、従って予測に影響を与えるのかという点についての解明の地歩を築くことで、今後の研究が進むべき基礎の構築を果たした点は十分評価される。また、本論文が、第一言語の読解予測研究で解明されてきた諸点を日本語教育の分野でも解明し、これらの諸点に関する実践現場へのフィードバックを可能にし得たことの価値も揺るがないものである。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。